白銀小

「わかった！できた！身についた！」が実感できる授業づくり

～算数科におけるユニバーサルデザインの視点を取り入れた指導の工夫～

（３年計画の４年次）

校長　　堀合　秀治

１　研究主題について

(1) 教育目標具現化の立場から

本校では「たくましく心豊かな子」を教育目標に、「明るく思いやりのある子、すすんで学ぶ子、健康にくらす子」を努力目標に掲げ、教育活動を展開している。その中で校内研究が特に担う役割は「すすんで学ぶ子」の育成である。学習をする上での基礎的な学習ルールを徹底させ、児童一人一人の学びの場である授業において、すべての子どもに主体的に学ぶ態度を身に付けさせ、確かな学力を保証することが「たくましく心豊かな子」の育成に寄与すると考える。

そこで、全ての児童に学ぶ意欲と、学ぶ喜びをもたせるため、ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくりを継続していくこととした。進んで学び、確かな学力を身に付けさせるためには、教師の授業力の向上が必要である。児童が「わかった！できた！身についた！」が実感できる授業づくりの研究は、学校目標にせまっていくことができるものと考え、研究主題を設定した。

(2) 児童の実態とこれまでの研究経過から

本校の実態として、基礎的な課題を素早く解決できる児童がいるが、授業の取り掛かりから時間がかかり、なかなか学習に乗れずにいる児童も多い。その差が大きいために、どちらも満足のいかない状態となっていることもある。また、この状態は授業への集中を欠きやすく、全員が確実に身に付けるべき基礎・基本の習得や授業中の課題の解決にも影響が出ていたが、６年前からユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくりに取り組んだところ、児童の学習への意欲が少しずつ高まり、学習の理解も深まってきた。昨年度は、「焦点化」を意識して授業することで、活動に見通しをもてるようになった児童が増え、児童の集中力も高まってきた。また、コロナ禍の中でも「共有化」の場面では、グループやペアで分担して発表するなど、全体で自分の考えを伝える場の工夫が見られた。伝え合いを繰り返すことにより、児童はペアや全体等で話し合うことが抵抗なくできるようになったり、理解が深まったりして、達成感も見られた。

しかし、コロナ禍の中、話合いや伝え合いが活発にできたとは言えず、ねらいに基づく発問や見通しをもたせる手立ても十分とは言えなかったので、「共有化」をどのような形で行うともっと効果的であるのか、活動のさせ方の工夫が必要であることが分かった。

そこで今年度も引き続き、「焦点化」の場面で見通しをもって課題に取り組めるような手立てや方法を工夫し、「共有化」の場面で児童のやり取りや深め合いが効果的にできるように、実践を蓄積していきたい。授業づくりにおける「焦点化」と「共有化」のより深い効果を算数科に絞って進めていきたい。それにより、児童が主体的に自分の考えをもち、その考えを伝え合うことで理解を深め、学びを確実なものにできると考える。

２　研究のねらい

すべての児童が「わかった！できた！身についた！」を実感する授業を目指すため、ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくりについて教員が理解を深めることによって、学習に困難を抱える児童だけでなく、全ての児童の学習への意欲が高まり学習の理解も深まることを授業実践を通して明らかにする。

３　研究仮説

ユニバーサルデザインの視点に基づいた授業づくりを推進することによって、全ての児童の学習への意欲が高まり、学習の理解も深まるのではないか。

４　研究内容

(1) 授業づくりにおける「焦点化」の場面で、子どもたちが見通しをもって取り組めるような手立てや方法を工夫する。（めあてや課題設定、発問の工夫等）

(2) 授業づくりにおける「共有化」の場面で、子どもたちのやり取りや深め合いが効果的にできるような手立てや方法を工夫する。

５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	学年・授業者・題材名等
6	14	教育指導課・総合教育センター訪問　　全学級授業 第１回授業研究　（２年１組）　　授業者　教諭　後藤　静花 算数「たし算とひき算のひっ算（1）」
9	8	第２回公開授業　（４年１組）　　授業者　教諭　淡路　衣津季 算数「割合」

(2) 一般研修

月	日	研　修　日　の　内　容
4	28	校内における配慮を要する児童の共通理解
6	9	一人一台端末活用研修（課題の配付・アンケート作成の仕方）
6	23	児童生徒のための調査法の活用（「アセス」の理解と活用）
6	30	教育指導課・総合教育センター訪問報告会
8	20	個別の指導計画の報告会 一人一台端末活用研修（共有ドライブ、デジタル教材チエルの活用の仕方）
8	25	県学力状況調査　学力分析
9	1	一人一台端末活用研修（オンラインによる授業の仕方）
11	24	特別支援指導について 講師　こども支援センター副参事兼主任指導主事　小林　真由美先生
12	8	児童生徒のための調査法の活用（「アセス」の理解と活用）
1	7	特別支援教育に関わる指導について　（さくら学級の実態・個別の指導計画）

６　研究の成果

(1) 焦点化の場面では、発問や課題提示を工夫する授業をすることで、既習事項を使って考えたり、自力解決へ見通しをもって取り組んだりする児童が見られるようになり、児童の意欲や集中力が高まった。

(2) 共有化の場面では、伝え合う場面を意図的に取り入れ、グループやペアでの発表の仕方を工夫することで、友達の考えを聞いて自分の言葉で説明したり、話合うことが抵抗なくできるようになったりするなど、理解を深めることができた。

７　研究の課題

(1) 焦点化の場面では、ねらいに基づく発問や見通しをもたせる手立てがまだ十分とは言えなかった。活動内容を理解することはできるが、問題解決につながる見通しまでもつことができない児童も見られた。今後は、児童がさらに見通しをもって主体的に問題解決に取り組めるような指導の工夫をしていきたい。

(2) 共有化の場面では、時間の確保が難しかった。個人差が大きく、発表者が固定化してしまったり、自分の言葉で説明できなかったりすることで、個別の指導に時間を要してしまうことが多かった。理解を深めるための更なる効果的な指導の工夫をしていきたい。

（記入者　古川　裕子）